別記第３号様式

平成１７年度　事後評価調書

機関名　アイヌ民族文化研究センター

整理番号	1	研究課題名	「久保寺逸彦文庫」中の写真資料に見るアイヌ社会の変遷の調査研究				
事業区分	※重点領域・一般試験等 一般試験	研究区分	(研究)	試験	(調査)	分析	研究期間　14 年度 ～ 16 年度
共同研究機関 （協力機関）	なし					全体所要額（千円）	566 (一財 566)

研究の概要

○　**研究背景**

・研究センターが所蔵する「久保寺逸彦文庫」には、1934（昭和9）年より、1970（昭和40）年にかけて久保寺逸彦氏が撮影した写真資料が多数含まれおり、その撮影時期は⑴1934年～36年、⑵1952年～54年、⑶1967年～70年の3時期に分類できる。この写真資料は研究者が記録したアイヌ文化関係の映像記録としてはもっとも古いものの一つである。また、アイヌ文化の記録を目的に撮影されたものであるが、撮影者の久保寺氏も未使用や撮影背景などを記録をしていないのものが多数含まれている。

○　**研究目的**

・昭和9年から、ほぼ20年おきに北海道各地でアイヌ文化を記録した写真内容を分析し、当時のアイヌ社会の様相を明らかにするとともに、資料として利用しやすくする。
・久保寺氏の研究の事跡の一端をたどることで、氏が収集したアイヌ文化関係資料の成立過程を明らかにする。

○　**研究内容**

・この中から、当時の集落の様相（建物・作物・衣服・儀式等）を分析し、各時代毎に様相の特徴を明らかにする。

○　**研究実績**

・平成14年度：サハリン・胆振・日高地方の集落等の確認
・平成15年度：道東地方の集落・衣服(1950年代)等の確認
・平成16年度：補足、保寺氏の記録ノートの関連事項の記載内容の確認、とりまとめ

直近の研究課題評価結果
平成１５年度 中間 評価
【自己評価】　(A)・B・C
【総合評価】　(A)・B・C

研究の成果

○　**具体的な成果及び研究目標の達成度**

・久保寺逸彦氏の撮影の足跡をたどることで、撮影時期、撮影地の確認を行い、その結果、約2,000点の写真について撮影時期、撮影地を特定することができた。その結果、家屋は、1930年代では、茅葺が主流である地域でも、板張りの和風建築が普及しはじめていることや、1950年代でも半地下式に近い住居も用いているところもあるなど、地域による差が大きいことが判明した。また住居の設備としても、茅葺の壁にガラス窓を持つもの、ストーブが付くものなど、伝統的家屋として知られる茅葺のチセであっても設備は時代によって変化していることが確認できた。撮影地における聞き取り調査によって被写体となった人物等の特定もでき、その結果、1950年代には、人物によっては、観光用に入手した他の地域の衣服を着用して撮影しているなど、撮影場所の特定されている写真資料であっても、撮影状況の確認が必要であることも判明した。
こうした調査によって撮影者の記録がなかった多くの写真について撮影情報を付すことができ、特に1930年の北海道からサハリン、1950年の北海道各地での撮影写真は、映像記録の少ない時代に、アイヌ文化の研究者が研究資料として撮影した貴重な資料であることを確認し、さらに久保寺氏の研究目的との関連などを明らかにするなど当初の研究目的を達成した。

○　**研究期間・経費の妥当性**

・期間・経費は、妥当であると考えられる。

（○　**他機関との連携**）

・共同研究体制はとらなかったが、資料と関係する市町村の博物館等の協力を得た。

○　**新たな展開に向けた課題**

・今回の調査研究で得られた情報を元に、他の写真資料との比較検討を行うこことで、写真から見るアイヌ文化の変遷をたどるなどの新たな課題の展開を検討する。

目標の達成度(a)・b・c
期間の妥当性 a・(b)・c
経費の妥当性 a・(b)・c
成果の有益性(a)・b・c

成果の活用策

○　**活用される分野**

・本調査研究の成果は、アイヌ文化研究、地域史研究、伝統文化の伝承や学習の基礎資料と活用できる。

○　**具体的な活用方策**

・アイヌ文化の理解や生涯学習の参考資料として、また、地域における伝統文化の学習資料、参考資料として活用が可能である。
・センターにおいては、将来的にはアイヌ文化に関する写真資料のデータベースを構築する予定であり、アイヌ文化の調査研究、学習資料として提供することが可能である。

○　**成果の普及**

・センターにおいて資料を公開するとともに、各種刊行物等で啓発等に利用する。

活用の可能性(a)・b・c

【自己評価】 (A)・B・C	【説明】 ・アイヌ文化研究者の撮影した貴重な写真資料の整理、内容分析を主とした本調査研究は、当センターはもとより、他の研究者や関係機関、学習者にも、資料に関するわかりやすい情報を提供できる研究であった。 （追跡評価の必要性 有・(無)）
【総合評価】 (A)・B・C	【意見】 アイヌ文化研究者の第一人者である故久保寺氏が遺した貴重な写真資料を整理、内容分析し、その結果、撮影当時のアイヌ民族の建物、作物、衣服等の変遷を時代ごと、地域差ごと等に明らかにできたことは、故人が遺した資料の重要性を再認識するとともに、今後のアイヌ民族の生活や文化等の調査研究に寄与することが期待できるなど、所期の目的は達成され、十分な研究成果が得られている。今後は、この研究成果の積極的な普及活用に努められたい。 （追跡評価の必要性(有)・無）

（A）目標を達成し、十分な研究成果が得られている
（B）目標を概ね達成し、一定の研究成果が得られている
（C）目標の達成度が低く、十分な研究成果が得られていない

（a）極めて高い、適切である
（b）高い、概ね適切である
（c）低い、改善の余地がある